慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ベデ・オヌオア神父著『アフリカ社会主義の基礎にあるもの』 |
| Sub Title | Onuoha, Father Bede; The Elements of African socialism Andre deutsch ltd., London, 1956, 139 pp. |
| Author | 小田, 英郎(Oda, Hideo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1967 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.3 (1967. 3) ,p.116- 119 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19670315-0116 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Onuoha, Father Bede:
# The Elements of African Socialism
Andre Deutsch Ltd., London, 1956, 139 pp.

## ベデ・オヌオア神父著
## 『アフリカ社会主義の基礎にあるもの』

一　現代のアフリカを論ずるにあたつて無視しえない問題のひとつに、アフリカ社会主義がある。なぜなら、アフリカ社会主義は、現在アフリカ諸国が共通の課題として担つている工業化・近代化、あるいは国家建設の効率をもつとも大きく左右するイデオロギーであり、制度だからである。

しかしながら、これまでのところ、アフリカ社会主義の問題はその概念のあいまいさ、イデオロギーの未熟さのために、十分検討されないままに放置されているといつて過言でない。単行本のかたちをとつて公刊された文献も、僅かに(1)Friedland, W.H. & Rosberg, Jr., C.G., (eds.), *African Socialism*, Sanford U.P. 1964, (2) Brockway, F., *African Socialism*, The Bodly Head Ltd., 1963, (3) Senghor, L.P., *Nation et Voie Africaine du Socialisme*, Présence Africaine, 1961 等を挙げうるにとどまるのである。これらのうち前二者はヨーロッパによる第三者的な研究ないしエッセイであり、アフリカ人自身による研究は、（雑誌論文は別として）サンゴールのそれのみである。

こうした現状から考えれば、ここに紹介するB・オヌオア神父の労作は、アフリカ人自身の手になる数少ない「アフリカ社会主義」研究書のひとつであるという意味において十分に存在理由を認められなければならないであろう。

著者オヌオア神父は、ナイジェリア出身のカトリック教会牧師であり、現在同国東部州にあつて布教活動をおこなつている。それでは、以下内容紹介にさきだつて、本書の構成を目次で示しておこう。

Forward by Father John Francis Maxwell
Author's Preface
1　Point of Departure
2　African Socialist Traditions
3　Principles of African Neo-Socialism
4　African Socialist Structures and Institutions
5　African Socialism and Religion
6　Definitions

このほか巻末に簡単な文献目録がのせられている。

二　つぎに本書の具体的内容についてであるが、全体をつらぬく基

本的な主張は、アフリカ社会主義がマルクス主義のような外来的（ヨーロッパ的）社会主義とは無縁な、オリジナリティーをもつた特殊アフリカ的イデオロギーであり、制度である、というものである。すなわち、ヨーロッパ人が侵入し、破壊する以前のアフリカ社会は社会主義的伝統をもつていたのであり、したがつて、「アフリカ人は共同体社会人 community man であり、生れながらにして社会主義的であつた」（三一頁）というのが、著者の基本的認識なのである。それでは、アフリカの伝統社会には、具体的にどういつた社会主義的要素があつたのであろうか。

著者はそれを以下のような表にまとめている。

| | Social Units | Social Processes | Social Negatives |
|---|---|---|---|
| 1 | The Extended Family | Work | No Loiterers |
| 2 | The Village | Discussion | No Loneliness |
| 3 | The Tribe | Co-operation | No Classes |
| 4 | The Chief | Leadership | No Communes |
| 5 | The Elders | Public Service | No Individualism |
| 6 | The People | Common Ownership | No Capitalism |
| 7 | The Priest | Common Worship | No Atheism |

そして「これらが伝統的なアフリカ社会主義のダイナミクスの構成要素である」と著者はいうのである（三一頁）。こうした論理から、「アフリカ社会主義は自己の再発見であり、わが父祖の英知と価値への回帰である」という一見伝統志向的な評価が生まれてくる（三七頁）。

しかし、著者はこうした伝統的アフリカ社会主義をそのまま再現するよう主張しているのではない。近代化・国家建設という現代的要請にこたえうるような、急速な発展をもたらしうるようなアフリカ社会主義＝ネオ・アフリカ社会主義を、伝統的価値を土台にして再構成する必要がある、と主張しているのである。

それでは著者の画きだすネオ・アフリカ社会主義とはどういうものであろうか。

著者はまずネオ・アフリカ社会主義の基本的原理としてつぎのものを列挙する。

1 The Principle of Fraternity
2 The Principle of Leadership
3 The Principle of Dialogue
4 The Principle of Planned Development
5 The Principle of Harmony
6 The Principle of Autonomy
7 The Principle of Positive Neutrality
8 The Principle of Pan-Humanism

つづいて著者は、これらの原理にもとづいて機能すべき「ネオ・アフリカ社会主義の制度」をうちだすのであるが、その骨子となるものは、直接普通選挙による大統領制、単一国民政党制、責任労働組合制、混合経済制度の四つにとどまる。これらについての叙述はいずれも簡単であつて、「青写真」と呼ぶ（著者）には粗雑にすぎるという感じをまぬがれない。たとえば、大統領制にしても、「大統領は別個の選挙を通じて人民の手で選任されるべきであり、かつ、

議会に対してではなく、人民に対して責任をおうものとすべきである。議会は立法をおこない、予算案を承認し、大統領はそれらを、人民のために執行する。こうすれば、安定した政府が生みだされるであろう」（六一頁）という程度では、提言の名にあたいしないであろう。また、「大統領は唯物主義者ではなくして、人道主義者であらねばならない。大統領の意図は人間をつくることであらねばならない。われわれが望んでいる開発は、人間開発なのである。工場、ハイウェイ、鉱山……などは、アフリカでは人間開発の必要な手段としてのみ、開発されるべきである」（六一頁）という「心がまえ論」も抽象的にすぎるであろう。単一国民政党制にしても、「本来複数政党制は西欧的階級社会の所産であり、伝統的に無階級社会であるアフリカとは無縁の存在である。同質的な成員からなりたつているアフリカ社会においては、単一の国民政党こそ必然的所産である。反対政党を政府から疎外している複数政党制は民主的とはいえないのであつて、むしろ単一政党制のもとで〈民主的に生活しようという意志〉に力点をおくことこそ、民主主義の本質である」（六二～六頁）という著者の主張には、（大部分のアフリカ社会主義者の主張と大同小異であるという意味において）新鮮味はない。せいぜいのところ、「混合経済制度」の部分で提言した「協同組合部門」に、その具体性と適用可能性をみてとることができる程度である（七三～六頁参照）。

以上のような論述を土台にして著者が規定した「ネオ・アフリカ社会主義」は、結局、以下のように漠然としたものにならざるをえないのである。すなわち、「一般的な言葉でいえば、アフリカ社会主義とは、あらゆるかたちの植民地的条件を効果的に脱却したアフリカ諸国の側における、自由で社会的責任感のある市民をもつた新らしい社会を、人間的連帯感・国民的統一・社会的平等・経済的民主主義といつた伝統的なアフリカ的諸価値が死滅しないような地点に建設しようとする、確固とした慎重な意志である」（一三二～三頁）。

三　以上紹介してきたところから明らかなように、著者の主張は、アフリカ社会主義の基礎を伝統社会・伝統的諸価値に求め、それを現代的に復元しようとしているという点において、格別の新鮮味をもつているわけではない。それはたとえば、セク・トゥーレのコミュノクラシー Communocracy の主張、サンゴールやニエレレのアフリカ社会主義論とほぼおなじ系列の議論として類別することができるであろう。そしてことに、ニエレレが、*The Basis of African Socialism* (Dar-es Salaam, 1962) なる小冊子（パンフレット）のなかで展開した主張に、大きな影響を受けているように思われる。実際、「現在みられるアフリカのさまざまな表現形態を分析すればわかるように、物質崩壊の時代――原子力時代――は、アフリカ人が自分の価値――人間的、社会的、精神的、文化的な――の真の源泉にたちかえる時代と符合している」[1]というセク・トゥーレの言葉に象徴的に示されているように、現代のアフリカはルネサンスの時期にあたつているかのごとくである。アフリカ社会主義のイデオロギー・制度もまさに、こうした潮流の一筋にほかならない。そうした

コンテクストにおいてとらえれば、著者のアフリカ社会主義論は、やや新鮮味に乏しいとはいえ、従来の主張を極めて手ぎわよく整理した点で、またその論点をいくつかはっきりと浮きあがらせたという面で、積極的に評価されるべき価値をもつているといえよう。

（1）セク・トゥーレ著、小出・野沢共訳『アフリカの未来像――黒アフリカの個性』、理論社、一九六一年、一五二頁。

（一九六六・十二・二十三）（小田　英郎）